

ヘブル人への手紙12章5-29節 「訓練を受けて前進」

1A 父からの訓練 5-11

1B 子への愛 5-8

1C 愛される者へ懲らしめ 5-6

2C 子の受ける訓練 7-8

2B 父への服従 9-11

2A 平和と聖さ 12-17

1B 霊的リハビリ 12-13

2B 苦みの根 14-15

3B 淫乱と俗悪 16-17

3A 二つの山 18-29

1B シナイとシオン 18-24

1C 恐怖のシナイ 18-21

2C 喜びのシオン 22-24

2B 天からの警告 25-29

1C 地上よりも厳しい処罰 25

2C 揺り動かされない御国 26-29

本文

ヘブル人への手紙 12 章の 5 節からです。午前礼拝で、1 節から 4 節までをじっくりと学びました。著者が、信仰的に後ずさりしているユダヤ人信者に対して、叱咤激励をしています。信仰によって生きることを、競走や戦いに例えて、疲れ果てて元気を失わないように鼓舞します。初めの 1 節から 4 節は、競走の時にイエス様から目を離さない、この方が苦しみや人々の反抗を忍ばれたことを良く思いなさいと勧めています。私たちは苦しんでいる時、信仰が試される時に、イエス様を思いを抱くと慰めを受けます。なぜなら、今、自分の通っているところに、その重荷を背負うようにしてそこにいてくださることを知っているからです。

しかし、その信仰の葛藤と戦いで、途中で後ずさりして、戦いを放棄してしまっていることを叱責しています。「12:4 あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」と言っています。

1A 父からの訓練 5-11

そこで著者は、続けて、「主からの訓練をないがしろにしてはいけない。」と勧めるのです。

1B 子への愛 5-8

1C 愛される者へ懲らしめ 5-6

⁵ そして、あなたがたに向かって子どもたちに対するように語られた、この励ましのことばを忘れて
います。「わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。⁶ 主は
その愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」

これは箴言 3 章 11-12 節からです。初めに、「忘れています」と言っています。私たちはしばしば
忘れてしまいます。試練が来ると、「苦しみを与えられているのは、神が自分に敵対しているから
だ」と思うってしまうのです。何か調子の良いことが起こる時に、神が自分に良く思っており、味方し
てくださっているしるしだと思い、そうでなければ敵対していると思うのです。いいえ、「神が私たち
の味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ 8:31)」と、キリスト者が苦しみ
の中で語っているのです。むしろ、このようなことが起こる時は、神が父として愛しておられること
のしるしであります。自分を子どもとしている、その愛の関係が深まるために与えられているのです。

次の、イエス様のことばは、注意深く読む必要があります。「黙 3:19 わたしは愛する者をみな、
叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。」叱ったり懲らしめたりするのは、
愛する者たちに対してなのです。憎んでいるから懲らしめるのではなく、全くその反対で、愛してい
るから懲らしめるのです。

主の訓練について、私たちは、なぜ苦しみにあうのかを軽んじてしまう傾向があります。その苦
しみを受けたことが衝撃となって、そのことを思うことさえ嫌になります。けれども、そこに主の御手
があることを思う時に、私たちは霊的に成長するのです。また、私たちは叱責を受けると、気落ち
します。どうして、そんなことを言われたいけないのか？と悩みますね。けれども、このことも、
じっくりと思いめぐらせば、自分にとって益になっているとよくわかるのです。教育的な効果です。
主が大切なことを教えられる時に、そのきついことを通すと、主の心を知ることができるのです。

2C 子の受ける訓練 7-8

⁷ 訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が訓練しない子
がいるでしょうか。⁸ もしあなたがたが、すべての子が受けている訓練を受けていないとしたら、私
生児であって、本当の子ではありません。

ここは、言い換えると「しつけ」について話しています。しつけのない父は存在しません。もしな
ければ、彼は本当の父ではないということになります。訓練、また、しつけがなければ、どうなるで
しょうか？善悪の判断基準が与えられず、どこに境界線があるのかが分からなくなります。何が正し
いのが分からないので自信が持てず、わがままな行動に出たり、鬱になったりとか、人格形成
がなされないのです。。著者が以前、霊的に成熟した人の話をしましたね。「5:14 固い食物は、善

と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」良い物と悪い物を見分けることが、できるようになるのが成熟の表れです。それを訓練として行なうのが父の役目です。

2B 父への服従 9-11

⁹さらに、私たちには肉の父がいて、私たちを訓練しましたが、私たちはその父たちを尊敬していました。それなら、なおのこと、私たちは霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。

しつけられる時に、子は父を憎まずに、尊敬して従います。なおさらのこと、霊の父である神に対して、私たちは尊敬し、服従して生きなければいけない、と言っています。しばしば私たちは神に、甘えることのできる存在だけで捉えます。ヘブル書の著者は、その反対でしょう？ということを開きかけています。すべての地上の父の源は、天におられる父だからです。私たちは、神が優しくて、お母さんのようであり、自分の願いをいつも聞いて、厳しいことは言わない存在であることを期待します。しかし、この方はその呼び名のとおり、父なる方なのです。この方には権威があります。服従すべき権威です。この方がそのように言われたのだから、ただそれだけが理由で、従うのです。そのようにして、霊的に成熟していきます。

¹⁰肉の父はわずかの間、自分が良いと思うことにしたがって私たちを訓練しましたが、霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練されるのです。

肉の父親の訓練は、完璧なものではありません。誤って叱ってしまうことがあります。一時的な怒りの衝動によって叱ってしまうことがあります。人間の父の限界です。そこで私たちは、しつけや訓練という言葉を聞くと、その歪んだ父親像を神に対しても当てはめてしまいます。

しかし、そうではないのだとここで強調しています。霊の父は、「私たちの益のため」です。すべてのことを行なってください。「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」とあります。益となることをしてくださいますが、益とは何か？続けて読みますと、「8:29a 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。」とあるのです。私たちが御子のかたちと同じ姿になることです。

ですから、ここで「私たちをご自分の聖さにあずからせようとして」とあります。私がしばしば分かち合う話ですが、若い時に、かつて仕事をしていた時、教会の祈禱会をある方の家で行われていました。私は、お昼食べた後の弁当箱を忘れてしまいました。次の週、その家の姉妹が洗ってくださっていました。けれども私は、また忘れてしまいました。次の週、その弁当箱を返していただきましたが、洗われておらずもちろん食べかすは腐っていました。けれども、それ以降、忘れないようになったのです。これは、神の訓練の方法をよく表していると思います。私たちが、自分のし

ていることの結末を味わうようにさせます。罪は何であるかを自分で知って、自ら罪を憎み、罪から離れるようになるのです。

¹¹すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。

当然ながら、しつけを受ける時に、それをうれしいとは到底思えません。苦しく思われるものです。しかし、その感情でさえが「そのときは」とあるように一時的です。「後になると」とあるように、ここに霊的成熟が試されているのです。人が成長するには、時が必要なのです。主を待ち望む時が必要で、そこで忍耐を働かせます。その中で、実が結ばれるのです。自動販売機のように、結果がすぐ出てくるのでは、良い実は結ばれないのです。

著者はここで、子を訓練する父というところから、運動でコーチが選手に指導する訓練にも重ね合わせています。「鍛えられる」という言葉を使っているからです。再び、競走する選手や、競技で戦う選手に置き換えています。

そこで鍛えられた後に出てくる実は、第一に「平和」です。なぜ平和なのかと言いますと、神の権威に服従できたからです。反発することは、自分のその時の気持ちは解消されるかもしれませんが、心に不安をもたらします。自分が権威の下で守られているという安心感がないからです。神に信頼して、服従することによって心が安定するのです。そして「義」であります。善悪を判断でき、何が正しいことかを見分けています。それで平和を造るに関わることができます。霊的に成熟したキリスト者たちがいればそれだけ、交わり全体が安定し、人々は安心できます。そこに、神の義があり、権威があるからです。

2A 平和と聖さ 12-17

1B 霊的リハビリ 12-13

¹²ですから、弱った手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。¹³また、あなたがたは自分の足のために、まっすぐな道を作りなさい。足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろ癒やされるためです。

ここで、著者は再び、競走を断念しているユダヤ人信者を鼓舞しているのです。信仰の中で苦しみを受けて、それで霊的に弱ってしまいました。弱った手は、歪んでいきます。これをリハビリでまっすぐにしないとイケません。膝が痛んで、これ以上進めません。けれども、著者は、霊的に、それでもまっすぐにしなさいと、強く勧めているのです。霊的なストレッチです。私たちはとかく、「ああ、こんなに弱っているのであれば、無理をしないほうがよい。」と言います。いいえ、むしろ動かした方がかえって、治りが早いのです。足の不自由になってしまった人も、まっすぐな道を作って、そしてその上を歩くようにします。不自由な人は、そのまま歩いたら円を描いています。なので、まっす

ぐな道を作ることによって、そこを歩いて歩行練習ができるようにします。

要は動くのです。体を動かすのです。このようにして、競走をやめてしまっている彼らに、再び立ち上がって走るように勧めているのです。

2B 苦みの根 14-15

¹⁴ すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。

迫害や反対を受けている中で、著者はユダヤ人信者に、「すべての人との平和を追い求め」なさいと勧めます。イエス様が、「マタイ 5:9 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。」と言われました。そこで、敵であっても、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」とまで命じられました(5:44)。使徒パウロは、「ロマ 12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」と勧めました。自分に関しないことまで、平和を保つことに、私たちは召されていません。そして、できる限り、と、パウロは言っています。というのは、こちらが平和の手を差し伸べても、相手がそれを受け取らない場合があるからです。けれども、自分に関しては、平和を保つのです。

そして、その平和を保つのは、先ほど見た、主からの訓練が必要なのです。私たちが苦しめられるのを通して、そこにも主がおられることを信じます。その中で、自分に品性が磨かれて、それで希望へと導かれていくのです。そうやって霊的に成熟した人は、しっかりと善悪の判断が経験によって下すことができ、義によって平和の実を結ぶことができるのです。

そして、平和であるためには、「聖さ」を追い求めないといけません。怒りや憎しみ、次に出てくる苦みが、どうしても心から出てきてしまいます。しかし、それらは汚れています。もし、憎しみから反対者に対して応じたら、私たちはその悪に関わるようになり、自分を汚してしまうのです。ですから、聖さを、熱心に追い求めないといけないのです。今、世界のいろいろなところで戦争が起こっていますが、あるクリスチャンが、「義憤に駆られて、自分自身が争いの心になっていけない。自分自身が平和を求めているか、吟味しないといけない。」という内容のことばを、話していました。

そして、イエス様が山上の説教で言われたように、「マタ 5:8 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。」なのです。心に汚れがある時に、自分は神を知っていると思っているけれども、実は見えなくされています。聖さがあって、初めて私たちは主を見ることができます。預言者イザヤのことを思い出します。彼は、御座におられる主の姿を見て、災いだと呼びました。自分は汚れているから、自分はもう滅んでしまうと嘆いたのです。そこで主の使いが、祭壇の炭からの火を彼のくちびるに近づけて、それによって彼がきよめられました。それで、主によってイザヤは

遣わされたのでした。

¹⁵ だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。

苦しみの中で、忘れてしまうのが、神の恵みです。神の恵みは、自分は罪人で、滅びなければいけないのに、神が一方向的に憐れんで、救ってくださったことを教えます。パウロは、自分のからだに棘が与えられて、それを取り除くように願いました。その棘はサタンからのものでしたが、自分が高ぶらないようにするため、神によって許されたものでした。けれども、主は語られます。コリント第二 12 章からお読みします。「12:9-10 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」神の力が、苦悩や迫害の中にある自分の弱さの中に、現れます。

なので、主がすべての中におられることを信じるのが大事なのですが、それを認めず、自己憐憫に陥ると、高ぶります。苦みは、そのような形で私たちの心の根を張ります。先にも説明したように、主からの訓練を受けると、分岐点に出会います。一つは、そこに主の恵みを見出すこと。そうすると、ますます自分が聖められます。平和を求めます。もう一つは、苦みを抱くことです。神に対して、人に対して苦みを抱きます。そうすると、汚れていくようになるのです。

そして、苦みというのは、自分の中に抑えておくことができません。レビ記では、汚れた者は自分に触れるものが、ことごとく汚れていく姿を描いています。人々を汚していくのです。自分がそれを隠しておけば、すなわち、自分が憎んでいても、人々の前では笑顔でいれば伝わらなくてすむ、と思うかもしれませんが。けれども、心にある憎しみと苦みは、必ず自分自身から出ていっています。「箴 26:24-26 憎んでいる者は、唇で身を装うが、心のうちに欺きを潜めている。声を和らげて語りかけてきても、信じるな。その心には七つの忌み嫌われるものがある。憎しみはうまくごまかし隠せても、彼の悪は集いの中で現れる。」特に、集い、信仰者の集まりの中では現れてしまうのです。

だから、「気をつけなさい」と言っています。「箴 4:23 何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」心に苦みの根がないかを、見張るのです。

3B 淫乱と俗悪 16-17

¹⁶ また、だれも、一杯の食物と引き替えに自分の長子の権利を売ったエサウのように、淫らな者、俗悪な者にならないようにしなさい。

ユダヤ人信者の中には、落胆と失望などから、目の前にある欲望に引き寄せられる者たちがいたのでしょう。主にある忍耐を捨ててしまうと、自暴自棄的に罪を犯してしまいます。そこで、エサウの例を取り上げています。彼の問題は、「神からの永遠の報いを、目の前の欲望と引き換えにした」ということです。ヤコブが、レンズ豆の煮物を作っていました。いつものように獵をして家に帰ってきたエサウですが、それが欲しいとヤコブに言います。ヤコブは、長子の権利を私にくださいと言います。それで、「創世 25:32 見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になろう。」と言って、食べてしまったのです。希望を忍耐をもって待ち望むことを放棄すると、このエサウのように目の前の欲に引かれてしまいます。

「淫らな者」とありますが、エサウは、周囲のヒッタイト人の娘を自分の妻としていました。リベカが、夫イサクをだまして、ヤコブに変装させて、彼を祝福させるように仕向けましたが、その理由を話しています。「創世 27:46 私はヒッタイト人の娘たちのことで、生きているのがいやになりました。もしヤコブが、この地の娘たちのうちで、このようなヒッタイト人の娘たちのうちから妻を迎えたら、私は何のために生きることになるのでしょうか。」そして、俗悪というのは、この日本語の通り、全く神を顧みないで、世的に生きていることです。

¹⁷ あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を受け継ぎたいと思ったのですが、退けられました。涙を流して求めても、彼には悔い改めの機会が残っていませんでした。

エサウは、イサクがヤコブを祝福したことで、自分には祝福が残されていないことを知って、声をあげて泣きました。それでも、イサクはエサウに対して、呪いは宣言しましたが祝福は与えませんでした。ここに、「悔い改めの機会が残っていません」とありますが、これは悔い改めたいのに、その機会がなかった、ということではありません。そうではなく、主ご自身について、まったく無関心で、無視しているのに、目先の祝福だけは受け取りたいと思っていたからです。その目先の祝福がなくなって、嘆き悲しんでいます。そもそも主を信じて、受け入れるつもりがないのですから、当たり前なのです。

そして、「悔い改めの機会が残っていませんでした」というのは、ちょうど、死んだ後に陰府に下り、苦しみのところに閉じ込められた金持ちのようです。乞食ラザロは、アブラハムのふところの場所にいて、慰められていました。彼は、後悔しても、向こう側には行けなかったのです。というか、後悔しても、悔い改めるつもりがないのです。地獄は、とこしえに後悔する人々が閉じ込められているところではあっても、悔い改めるつもりのない人々の処です。

3A 二つの山 18-29

1B シナイとシオン 18-24

そして次に、著者は、ユダヤ人の信者が行き着くところが、どこかを教えています。彼らは、イエ

スへの信仰が揺らぎ、ユダヤ教の神殿礼拝に埋没しようとしていました。しかし、キリスト者は、律法が与えられたシナイ山に近づいていないのだよ、主なる神が住まわれるシオンに近づいているのだよと、励ましています。

1C 恐怖のシナイ 18-21

¹⁸ あなたがたが近づいているのは、手でさわられるもの、燃える火、黒雲、暗闇、嵐、¹⁹ ラツパの響き、ことばのとどろきではありません。そのことばのとどろきを聞いた者たちは、それ以上一言も自分たちに語らないでくださいと懇願しました。²⁰ 彼らは、「たとえ獣でも、山に触れるものは石で打ち殺されなければならない」という命令に耐えることができませんでした。²¹ また、その光景があまりに恐ろしかったので、モーセは「私は怖くて震える」と言いました。

古い契約が与えられたのは、シナイ山においてです。その時の様子は、ここに形容されているように非常に恐ろしいものでした。それは律法の性格をよく表しているものでした。律法は神の聖なる御姿と、また罪ある者たちを裁くという神のご性質を表しているものでした。イスラエルの民が、神とその律法について、真剣になるように神が彼らを試すために、敢えてご自身の姿を表されたのです。

著者は、あなたがたは、これに近づいているのではないと話しています。つまり、古い契約は律法による罪定めと死をもたらすのであり、それらにあなたがたは近づいているのではないと励ましています。イエス・キリストにある恵みから離れて、ユダヤ教の中に戻ろうとする人々に対して、律法の実体を思い出してほしいという意図があります。

2C 喜びのシオン 22-24

²² しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、²³ 天に登録されている長子たちの教会、すべての人のさばき主である神、完全な者とされた義人たちの霊、²⁴ さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血です。

こちらが、キリストを信じている者たちが近づいている山です。信仰の競走を経て、その目標にあるのが、シオンの山であります。シオンとは、エルサレムにある山で、シオンの要害とも呼ばれました。エブス人が、かつて住んでいたところです。そこをダビデが奪還して、ダビデの町としました。そして、彼の子ソロモンが、シオンの山の北隣にあるモリヤの山に神殿を建てます。それから、シオンはエルサレム全体を指すようになっています。

しかし、ヘブル 11 章から著者が強調していることは、信者が待ち望んでいるのは、地上にあるもの以上に、天上にあることなのだということです。アブラハム、イサク、ヤコブが待ち望んでいたの

は、天にある都であることを語っていました。約束の地に入ったものの寄留者の生活をしていましたが、彼らには、神の建てた堅い都が天にあり、それをはるか遠くに見て、喜び迎え入れていたとあります。同じように、地上にあるシオンは、後に来る「生ける神の都である天上のエルサレム」を写し出しているのです。

天のエルサレムとは、どういうところなのか？これは、主が御座に着座しておられる天が、新しい天と新しい地に降りてくるところの都です。「黙 21:1-2 また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た。」天には、いくつかの天があり、いと高き方の住まれる天があります。「詩 103:19 【主】は天にご自分の王座を堅く立てその王国はすべてを統べ治める。」すべてのものが過ぎ去っても、主の御座はなおも残り、その天が新天新地に降りてきて、主のものにされた者たちがそこに住むのです。ですから、はるか高いところに神の御座があるのではなく、自分たちの住んでいるところに御座があります。「黙 22:3b-4 神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」

その都の特徴は、喜びと祝福です。シナイ山における恐ろしい暗闇とは正反対ですね。一つ一つ特徴を挙げています。初めは、「無数の御使いたちの喜びの集い」です。イエス様が、悔い改める者がいたら御使いたちに喜びが沸き起こることを語られました(ルカ 15:10)。そして、黙示録 5章には、天において、子羊が封印を父なる神から手にすると、新しい歌を生徒たちがうたいます。そして、御使いも叫びます。「黙 5:11-12 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。彼らは大声で言った。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」この都に近づいているのですから、私たちは、自分が救われるだけでなく、他の人が救われる時にも喜びに満たされるのです。

次の特徴は、「天に登録されている長子たちの教会」です。イエス様は救いの本質を、天に自分の名が書き記されているかどうかで言い表されました。「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」長子たちの教会、というのは、黙示録 4章に出てくる、御座の周りで神を礼拝する 24 人の長老たちのことでしょう。「4:10a 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。」私たちは教会というと、地上における教会だけを考えてしまいがちですが、このように天にまで拡がっており、私たちはそことつながって、天とつながり、そして主を礼拝しているのです。

そして次の特徴は、「すべての人のさばき主である神」です。最後の審判において、すべて人を

神は裁かれます。黙示録 20 章にある、大きな白い御座がそれです。この方がおられて、それから「完全な者とされた義人たちの霊」とあります。天において、子羊の婚姻の幻をヨハネは見ましたが、聖徒たちがきよい亜麻布の着物を身につけています。「黙 19:8 花嫁は、輝きよい亜麻布をまとことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」正しい行いを表していました。主が、信仰によって私たちを義とみなしてください。みなして下さるだけで、まだ義とされていません。しかし、主が戻ってこられる時に、義としてくださるのです。

次の特徴は、「新しい契約の仲介者イエス」です。この方こそが、天のシオンの中心であります。著者は、ヘブル書において、新しい契約が結ばれたことを強調しました。その契約の仲介は、イエス様です。この方がご自身の血を流されて、それで、罪の清めを完全に行い、私たちが神と一つに結ばれるという、贖いを成し遂げてくださいました。このことが、都の中心にあるのです。黙示録においては、イエス様が「子羊」として、天において真ん中に出て来られます。天のエルサレムでも、神と子羊の御座が出てきます。この方が新しい契約の仲介者なのです。

そして最後の特徴は、「アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血」です。その後、アベルが流した血が書かれています。11 章の初めに、アベルが信仰によって、いけにえを献げたことが書かれていました。カインが妬み、アベルを殺しました。その流された血が、地上から叫んでいると、主はカインに言われました。このようにして、アベルの義が証しされました。

信仰による義です。しかし、アベルの流された血は無念の死が、復讐を願っている血でもあります。正しい者が血を流したのですが、その血が報いられる時がきます。「黙 6:9-10 子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」」このように、信仰の故に流される血に対する復讐を、神は終わりの日、大患難において行われます。

しかし、イエスの注がれた血は、無念の死ではありません。それは、全ての人の罪をすべて取り除き、永遠に取り除き、すべてを清め、天の聖所をきよめる血であります。そしてもちろん、新しい契約を有効にする、血なのです。この方の流される血が、天のシオンの中心の中心なのです！あなたがたは、ここに近づいているのですよ！と言っているのです。そして、これが信仰の競走の目標地点、ゴールであります。

2B 天からの警告 25-29

これほどまでに、大いなる恵みにあずかっているのですから、私たちが、この恵みを拒んだらどうなるのか？という警告を次にしていきます。

1C 地上よりも厳しい処罰 25

²⁵ あなたがたは、語っておられる方を拒まないように気をつけなさい。地上において、警告を与える方を拒んだ彼らが処罰を免れなかったとすれば、まして、天から警告を与える方に私たちが背を向けるなら、なおのこと処罰を免れられません。

10 章 26-31 節において、神の恵みと新しい契約を侮る人は、旧約時代の処罰よりもさらに重い処罰があることを著者は警告していました。ここも同じです。地上において警告を与えた、というのは、シナイ山において律法によって、モーセを通して神が警告を与えられたということです。その警告に聞き従わない者たちは、処罰されました。例えば、金の子牛を拝んで殺された者たちもいるし、貪りの罪を犯して死んだ者もいるし、コラのような反逆の罪で死んだ者もいます。

しかし、新しい契約の仲介者、その流された血を拒むのであれば、天から警告を与えておられる方が処罰を与えられます。黙示録 20 章、またそれ以後にも書かれている、永遠の火と硫黄の池に投げ込まれることです。それは、悪魔とその手下どものために造られたところですが、キリストの恵みを意図的に拒むのであれば、その意思を神は尊重しなければいけません。恵みを拒んだ者に、恵みを無理やり押し付けることはできません。行いによって裁かれるところに、自ら選んで、その悪魔と悪霊どもの閉じ込められている地獄へと、投げ込まれるのです。

2C 揺り動かされない御国 26-29

²⁶ あのとときは御声が地を揺り動かしましたが、今は、こう約束しておられます。「もう一度、わたしは、地だけではなく 天も揺り動かす。」

「あのととき」とは、シナイ山の時のことです。神の声によって地が揺り動きました。けれども、預言者ハガイは、「もう一度、わたしは、地だけではなく 天も揺り動かす。」という神の御言葉を語りました。地だけでなく、天をも揺り動かす大異変があります。キリストが地上に戻って、千年間、キリスト者と共に統治されたのち、悪魔が解放されたてますが、主が悪魔を火の池に投げ込まれます。

²⁷ この「もう一度」ということばは、揺り動かされないものが残るために、揺り動かされるもの、すなわち造られたものが取り除かれることを示しています。

天地が過ぎ去ります。そして、神の白い大きな御座が現れます。そして、新しい天と新しい地が造られて、そこに天からの都、エルサレムが降りてきます。この揺り動かされることのないものが残るために、今の天地が過ぎ去るのです。使徒ペテロも預言しました。「Ⅱペテ 3:10-13 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。

そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」

²⁸ このように揺り動かされない御国を受けるのですから、私たちは感謝しようではありませんか。感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝をささげようではありませんか。

ここに書かれている、「感謝しようではありませんか」の元々の意味は、「恵みを持つようではありませんか」となっています。私たちに、この天地が崩されてもなおのこと残る御国が与えられています。もっぱら神の恵みによるのです。この恵みに触れる時に、私たちはむしろ敬虔と恐れ、すなわち主を恐れ敬います。

そして、「神に喜ばれる礼拝をささげようではありませんか」と言っています。私たちの礼拝が、この恵みに触れた、神への感謝と、恐れ敬いによる礼拝でありますように。そして、その恵みに裏打ちされた礼拝を、神は喜んで受け入れてくださいます。

²⁹ 私たちの神は焼き尽くす火なのです。

著者は、恵みを語りながら、警告を織り交ぜています。恵みがあるのに、それを拒む危険を彼らの中に犯している者たちがいたからです。神は愛です。しかし、神は光でもあられます。聖い方です。そして、その火でもおられるのです。その火は、神を恐れる者には清めにはなりこそすれ、燃え尽くすことはありません。不純物が取り除かれるだけです。けれども、信仰によって近づかないのであれば、同じ火は燃やし尽くすのです。レビ記 10 章に、アロンの二人の息子、ナダブとアビフが異なる火を携えて、至聖所に入ろうとしたら、火が主から出てきて彼らを焼き尽くしたとあります (10:1-2)。主にお仕えしている者が、主の恵みに従わないで近づくのであれば、こうになってしまうのだよ、ということです。そして律法の下での処罰は、地上における焼き尽くしですが、恵みを拒んだところにある裁きは、地の下における火の池における裁きだということです。

今回は、ついに最後の章 13 章です。いくつかの勧めがあって、キリストの辱めを恐れずに受けようという勧めで終わります。